

職種	名前	テーマ
コラムニスト	青木 雨彦	ネクタイと私

No.9



インタビュー屋である。いつでも、どこへでも出かけて、お話を伺ってくる。インタビューのコツは、こっちも話をもっていることだ。こっちに何の詰もなくて、相手から話を聞き出そう、というのはちと虫がいい。

インタビューに出かけるときは、必ずネクタイをしめていく。ある週刊誌に六年間余もインタビュー記事を書きつづけたが、ネクタイをしめていかなかったのは、たった一回だけだ。あのときは、スケジュールの都合で、どうしても「登山からの帰り」ということになってしまった。いくらなんでも、山登りにネクタイをしめていくわけにはいかない。

お相手は、女優の中井貴恵さんだった。ご存じ佐田啓二さんの遺児である。デビューしたばかりの頃で、お母さんがつきそってこられたが、自己紹介をしてビックリした。高校時代、わたしは中井さんのお母さんの母校に廟を貸してもらったことがあるのである。

終戦直後の昭和二十四年だった。わたしたちの学校が進駐軍の火遊びで焼失し、隣接の女子高校に同居した。

「じゃあ、あのときの……」

「そうなんです」

ふたりで昔話に夢中になっているのを、貴恵さんが拗ねて、

「ねえ、あなたは誰にインタビューにきたの？」

いまにして思うと、あれは、わたしがネクタイをしめていかなかったための失敗だった。わたしは、ネクタイをしめていかなかったために、ついインタビュー屋としての分を忘れてしまったにちがいない。

俗に、

「一匹オオカミ」

というけれど、わたしなんぞは一匹コヒツジみたいなもんだ。

どこの組織にも属さず、名刺にも肩書きひとつない。

どこかの組織に属していれば、それだけで他人は信用してくれるかも知れないが、わたしには、それが無い。そのために、わたしは外見に気を使う。外見すなわちネクタイである。

正直な話、

「もし、この世にネクタイがなかったら？」

と考えると、ゾッとする。もし、この世にネクタイがなかったら、インタビューに臨むにあたり、どうやって自分が無難な人間であることを証明するのだろうか？

わたしにとって、ネクタイは鑑札みたいなものだ。まちがっても、いいかげんにしめるわけにはいかない。

s.55.7.

Copyright:(C) 2002 IMAI CO.,LTD. All Rights Reserved.

職種	名前	テーマ
俳優	前田 武彦	僕とネクタイ

No.10



僕の唯一の趣味道楽は船である。週末ごとにヨットハーバーに出かけ、仲間たちと沖へ向う。ちょっと聞くとさもダンディなようだが、実際はおよそ色気のない姿なのである。夏はTシャツ、冬はぶ厚いセーター、悪天候には上から下まで雨ガッパ。

とてもファッション雑誌にある”マリン・ルック”のようなスマートさはない。海の仲間はそんな色気のない姿を「汐気のあるいでたち」と認識している。音楽ショウに登場するような、マドロススタイルだとかニューファッションのリゾートウエアの男女がヨットに乗っていたら、それはきっとテレビCM撮影のモデルさんに違いない。

さて、そんな海の仲間が時おり集まって開くパーティ。日ごろの欲求不満の反動か、みんなパリッとした服装であられる。

といってもせいぜいブレザーコートに錨の模様入りのネクタイといった程度なのだが、いつものスタイルからすれば正にパリッとして見えるのだ。

「おや見違えましたな」

「あなたこそ、ネクタイをお持ちだとは知りませんでしたよ」

などと和やかに笑い合う。陽やけした肌に白やブルーのシャツ。ネクタイがみごとに調和する。ネクタイは、めったにしない人にも、いつもしている人にも楽しいオシャレのポイントである。

男に生まれて良かったと思うのは、そんな事を感じる時でもあるようだ。

s.54.5.

職種	名前	テーマ
高千穂商科大学図書館館長	宮本 昇	ネクタイは男の心理学

No.11



もう一年ぐらい前の話になるだろうか。

都営地下鉄の車内で「時計は女の心理学」という広告を見つけた。それは、ある時計メーカーの宣伝だが、このキャッチ・フレーズを読んで、産業心理学を専攻する私は、商売柄(?)たいへん強烈な印象をうけたことを覚えている。

その時、「うまいことをいうもんだな」とつくづく感心したあと、それならば一体、何が男の心理学だといってキャンペーンをしたらこのようにうけるだろうかと思い、改めて一人で連想ゲームをやってみた。そしてその結果が、この「ネクタイは男の心理学」ということだった。

ところで、今から十五年ぐらい前から、ピーコック革命などといって、男が色もののYシャツを着る風習が一般化してきたが、それでも、男が服装における自己表現の手段として、目立つおしゃれをすることでいうのは、女に比べればごく限られたところである。もちろん、ネクタイはその数少ない表現手段のなかで、最も有力なものである。

そこで、その色合や柄、また、織り方や素材などを通して、男たちは自分の色彩感覚や趣味の傾向を、また、他の衣服とのコントラストを通して、自分の生活感覚や教養の深さを、精一杯表現していこうとするわけである。

しかし、客観的にみると、人はネクタイを通して自分の気質や気性、すなわち人柄を率直に表現しているように思われる。内閉的(体型はヤセ型)な人は複雑な色合で繊細な柄を好み、いつもそれをキチンと結んでいる。ところが、同調的(体型はフトリ型)な人は単純な色合で大柄を好み、一応、それが首からぶらさがっていればよいという感じである。

また、勝気な人は派手なものを、弱気な人は地味なものを、より一層好む傾向があるようである。所琴人間は表情や行動で自分の心を自然に表現すると共に、ネクタイや服装で自分の心をさらに積極的に表現していこうとするものなのであろう。

s.58.7.

職種	名前	テーマ
文博・カインドウエアー社長	渡辺 国雄	明治天皇とネクタイ

No.12



明治五年十一月十二日は太政官より公式な制度として、「洋服を以て礼服となす」方針が打ち出され、文武官の大礼服から民間の通常礼装、制服などに至るまで、急速に洋服化が進められた。

これより先慶応三年板行の、片山淳之助の西洋衣食住を開くと、西洋服を図示しその付属品を説明し、駐袋(靴下) スtocking、首巻(カラー) コラル、衿巻丁不クタイ)ネクタイ等と昭和の今R妄百年余り前既に変わらない名称用語の説明は興味深い。

明治両陛下の奨励が国民の洋装普及に大きな影響を与えたことは勿論である。それでは天皇自ら何年頃より御着用されただろうか。五年頃かと思う。

文献の記録は沢山あるが天皇のお姿を直接撮影した証拠となる写真は、四枚(?)程しか残っていない。最初の写真は即位当時の黄櫨染御袍の若き束帯姿。二番目のお写真は洋服で、初めて大元帥服着用のもので、中国九州ご巡航の五年六月前後のものと思われる。三枚目の写真は観兵式に臨む愛馬金華山号に召された英姿。四枚目は陸軍大演習の折、お野立所で武官から説明をお受けになる側面より机上の地図をやや前身でのぞきこまれる姿勢。第三、四枚とも陸軍軍服。このように年月の明らかに出来る陛下の写真記録は誠に少ない。一般に広く知られている多数の勲章を僱用した陸軍礼装の写真の原画は油絵に陛下を画いたもので、その複写である。又上半身の側面の軍服の写真は四枚目の写真の部分的引伸しのもの。

これら写真に見る限りでは通常の民間礼装などの当時流行したフロックコートにネクタイのスタイルはなさらなかったのか、ご遺品のなかにフロックコート夏冬の二着、長く文化財保護委員会(現在の文化庁)が寄託を受けていた調査ずみの間違いのない御下賜品があり、現在愛知県尾西市の墨毛織資料館蔵である。

ネクタイは日清日露を経て崩御に至る長期にわたり、天皇の側近に侍医頭となり奉仕した男爵岡玄卿が拝受した白絹の蝶ネクタイ二点が、数年前まで同家に数々の御下賜品と共に保管されていた。

天皇の偉大な治績を後世に伝える目的の明治神宮の聖徳記念絵画館を飾る壁画八〇点のなかに、フロックコートにネクタイのお姿が三面ある。この壁画は天皇側近者の正確な記録により画かれた権威あるもの故、ご遺品の貴重な証明の一つである。

その壁画の第一は明治七年赤坂仮皇居に於ける天皇御修学を画いたフロックコート姿に、黒色の棒ネクタイの「侍講進講」の模様。第二は明治十四年十月に貨幣制度の改良の説明をお受けになる赤坂仮皇居の御座所のフロックコート(?)に黒色棒ネクタイの天皇。第三は二十一年赤坂仮皇居に於いて屢々開かれた「枢密院憲法会議」に、黒色に見える蝶ネクタイにフロックコートらしい姿で正面お机に向ってのお姿。

写真に残るものには先の四枚の束帯、軍服のものしかないようであるが、壁画や、それを証明されるに相応しいフロックコートお召しの珍しいお姿の天皇、そして又二種類のネクタイをご使用された様子も窺うことが出来る。岡男爵家には燕尾服用のワイシャツが御下賜品のなかにあったので、或は先の蝶ネクタイは、燕尾服を着用なさった場合もあったのではとも思うのである。

s.58.7.

Copyright:(C) 2002 IMAI CO.,LTD. All Rights Reserved.

職種	名前	テーマ
デザイナー	大高 猛	駐留軍とネクタイ

No.13



「絵をかくアルバイトをやってくれないか」下宿の近所の女性から話がかかった。

戦後間もない昭和二十五年頃。大学卒業後、勤めた工場が、労働組合の紛争で潰れ、失業中だったから文句なしに飛びついた。当時、アメリカ駐留軍の漕保PXが大阪南のそごうデパートにあった。そのアートショップが、いまの大阪国際空港の前身である伊丹飛行場に出店するという。そこのアルバイト雇用のためだった。

米軍兵の包裹、いまの大型トランク位の帆布地のバッグに注文に応じて英文字の名前や地名、それに日本の名勝地、たとえば富士山、お城、鳥居、五重の塔、錦帯橋など油絵具で描き込む仕事だった。書き損じもできない、厳しい仕事でもあった。

特別注文では、戦闘機の胴体にマンガやヌードなどを描く楽しい仕事もあった。あっけらかんとした陽気な軍隊生活、日本の軍隊と思い合わせて驚かされた。中には、負傷した白いギブスの上に恋人の名前を描いてくれ、なんて無邪気な兵隊もいた。

そのうち、次第に基地が縮小され兵隊が減ってゆくに連れて逆に日本滞在記念にと、ショップに来る客が増えていった。

絹のハンカチに妻や子供、恋人のポートレートを薄塗りで描く、これが結構評判で繁盛した。その頃、ネクタイ需要も増してきた。本絹特別仕立のネクタイに日本の風景や、人物、ばらの花、ペットの犬や猫、中にはハンカチとセットで、ハンカチはご夫人、ネクタイはベビーのポートレートを描く。また、ふるさとの風景をと写真を持って来るなどバラエティに富んで結構面白い。たが、注文を聞いてから納品が翌日という超スピード仕上げが要求された。

家に持ち帰って連夜、数本のネクタイを仕上げて翌朝に手渡すという、体力と根気のいる無茶なアルバイトだった。失敗の許されない仕事で、真剣勝負だった。

お陰で失業時代を絵の勉強とお金儲けで精神的に気楽な生活ができた。手描きのネクタイを見ると、青春時代の背景が走馬燈のように駆け巡る。それにもまして、ふと、僕の描いたネクタイが、いまま日本とアメリカの友好の絆になっていると思うと、なんだか胸がジーンとしてくるのである。

s.58.4.

職種	名前	テーマ
アメリカンファミリー副社長	大竹 美喜	オリジナル・ネクタイ

No.14



ネクタイを頂く機会は割に多いが、その見立てに先方の個性なり、当方への観方がうかがえて楽しいものである。

中には、思いがけず自分のいままで気づかなかったセンスを刺激してくれるものもあり以外に感化力のあるものだと感じるときがある。

そこで、三年程前に自分の姓に因んだ竹をデザインしたネクタイを千本ほど作り、機会を見ては差し上げることにしている。

濃紺の地に金糸で、大竹ならぬ小竹をちりばめたものだが、決して高価なものでないから、当方で差し上げるのを遠慮している方も多い。

それでも、現在までに六百本ほどプレゼントしたであろうか。

大変喜ばれ、中には私と会うときは、必ずそのネクタイを締めて来て下さる律儀な方もいらっしゃいます。

そんなときは、やはり非常にうれしいし、我ながらいいアイデアだったと自画自賛の喜びに浸る。在庫が切れたら、ニューデザインのネクタイを登場させようと、いまから楽しみにしている。

s.55.5.

職種	名前	テーマ
元横綱琴桜	佐渡ヶ嶽 慶兼	"まわし"から"ネクタイ"へ

No.15



現役時代は、職業柄和服ばかりで、ネクタイとはまるっきり縁がありませんでした。同じ締めるものでも、ネクタイではなく、“まわし”にお世話になっていたほうです。こんなことは言わずと知れたことと思いますが、今でも“まわし”を締めるたびに気が張ってきたのを覚えています。まさに心地よい緊張感でした。

引退してからは、現役当事とは逆に、背広を着用することが多くなり、公式の場にもよく出席します。ですから当然の如くネクタイを締める機会も多くなりました。“まわし”の代わりに、ネクタイを締めるようになったとでも言いましょうか。

ですが困ったことに、体型が普通の人のご二倍、いや三倍はあるものですから、背広はもちろんのこと、ネクタイも既製のものでは役に立ちません。私にとって普通のネクタイは、蝶ネクタイぐらいにしかならない感じになってしまうんです。

というのも、私の首周りが六十二センチもあるからなのです。だから私のネクタイは、全て特注品で、二本を一本に加工し直してもらうわけです。普通の人のごネクタイは百三十五センチ、私のネクタイは百六十五センチです。こんなふうにごネクタイの長さ、方は体系に左右されてしまうんです。もちろん柄も色も体の大きさを考えて、大柄なもの、明るい色のものを好んで締めています。“まわし”でいえば“化粧まわし”とでもいうのでしょうか

長年、和服を着ていたせいでしょうか、色の組み合わせを楽しめる和服を着るようになってから、コーディネートに気を使うようになりました。

柄物ですと“龍”とか、“竜の落とし子”等の絵柄がすきなんです。それというのも、私の生まれた年が辰年であることと“龍”と言うものが、鱗中の長として心霊視される動物であるあるとされているからです。

簡単に言えば縁起をついでいるわけです。この趣味は、ネクタイばかりでなく、カフスとかタイタックなどのアクセサリーにもおよんでいます。コレクションといったほうがいいのかもかもしれません。

現役を退いた今、“まわし”を締める代わりに、“ネクタイ”を締めることで気を引き締めています。“まわし”というものは、その昔、男性の象徴であったように、現代の男性の象徴はは、“ネクタイ”ではないでしょうか。

s.58.4.

職種	名前	テーマ
資生堂宣伝部長	中村 誠	七人の敵

No.16



男は外に出ると七人の敵がいると言う

実感として、こちらの感度が鈍いせいなのか、幸いに、あまり敵の存在を感じないで、日々を遅らせていただいている。

そのくせ、「兜に香をたいて戦場に出る……」という武将の心意気などに共感があって、なにかにピリットしたいという願望は常に外に出るとき持っている。

私にとって、そのピリットがなにか？となると 起き掛けに使うヘアトニックが、頭にピリットしてみてもいいとき位だろうか、いやもう一つある。朝、ネクタイをピリット結ぶ瞬間が好きである。

”これで今日も一日”という気分になれる。私はデザイナーなので、社の内外でなかなかラフな、カッコウの良いいろいろな連中に出会う。内心で奴らも俺を見ているな、という敵対意識がどこからか生まれてくる(そういえばこれが敵なのかもしれない)。そのときの武器は私にとってはやはりネクタイなのである。

スーツは、シーズン二、三着しか持っていないけど、ネクタイは常に、家に二十本、会社のロッカーに十本は置いてある。

会社に出るときと、退社後仲間に会うとき、いつどのような敵に出会ってもよいようにというつもりである。そういえばネクタイの形は、あのこわい鐘馗様が持っている剣のアウトラインである。

やはり男の武器か。

s.54.9.

職種	名前	テーマ
共立女子大学講師	橋本 太久磨	藤田嗣治のネクタイ

No.17



藤田嗣治先生が日本へ帰って来たばかりの頃、高田馬場の中村邸の屋敷にアトリエを構えていた。その頃、私は画学生で度々先生のアトリエに出入していた。

先生の最初の夫人アドレーヌさんが二十九歳の若さで突然深夜亡くなられ、その葬儀の時の藤田先生の服装が強く印象に残っている。夫人の死を知ったのは、私が先生のアトリエを訪ねた翌日の昼のラジオニュースであった。

昨日、元気に私に対応してくれた人が死んだとは、一瞬信じられなかったが取るものも取りあえず馳せつけ、通夜や葬儀の手配に忙しい三日間であった。

キリスト教会での葬儀であったが、通夜に沢山の名士が集り、今は亡き大辻司郎、古川緑波、その他の一流文化人連が集り華やいだ雰囲気包まれていた。

葬儀の当日、黒布に覆われた柩の傍にたたれた先生は例のオカッパ(当時はまだ黒髪であった)に平常とあまり変らぬ表情でブルーグレーのフロックコートに堅いハイカラーの白の折り返しの襟元にダークヴァイオレットブルーのネクタイの大きな結び目がアクセントとして素晴らしい効果をもって全体を引締めていたのが印象的であった。

とくに周囲の黒ずくめの弔問客に囲まれて一層引立って見えたのである。

しかし、何の不自然さを感じないばかりか当然のように感じられたのである。

元来絵描きはフォーマルな服装は好まないものだ。

特に先生は、若い頃、パリで生活の苦しかった時毛布に穴をあけておかっぱ頭を出してキートン風に紐でウエストを締めてモンマルトルを闊歩して名物男になった人である。

それだけに、形式的なフォーマルを嫌い、人と異なった個性的な装いをされたと思う。

藤田先生の心の滲み出たあのダークヴァイオレットブルーのネクタイの大きな結び目がゆん重念以上たった私の脳裏にはっきりと美しく焼きついているのである。

S.58.7.

職種	名前	テーマ
画家	横尾 忠則	百本のネクタイ！

No.18



ネクタイを締めることはめったに無いといっても、最近はどうでもなく、時にはする。以前は背広など着ることはまったく無く、そんなわけでネクタイも必要なかった。だけど最近、一番気に入りの洋服と言うことになるとやっぱり背広で、といってもスーツを着るのには抵抗があったり、また自信が無いので上着だけをセパレーツに着ることにしている。

ネクタイが必要になったのはこういうわけで、といっても沢山の種類のネクタイを持っているかということはない。せいぜい五、六本だ。またシャツも四、五枚程度だ。外国に旅行したとき、ひとつ、ふたつ買う程度だ。二、三年前までは海外へ行くと買い物魔に変身して流行っているものを片っ端から買いあさっていたが、このところ、ビョーキは突然治まり、買い物には楽しみが無くなって、何にも買わないで帰ってくることに法が多くなった。

以前、一九六七年に初めてニューヨークに行った時、僕はネクタイばかり百本も買った記憶がある。このときは、ニューヨークに四ヶ月近く滞在していたが、どういうわけかネクタイばかり買っていた。ちょうどサイケデリックがはやっていて、色とりどりの花模様のネクタイがどこへ行っても目立ち、ついあれもこれもという感じで買ってしまったのだ。この時、作曲家の一柳慧さんもニューヨークに滞在しており、彼と毎日一緒に町をぶらつき、彼も僕以上にネクタイを買った。ふたりでネクタイ屋をやろうと相談したくらいだった。

なぜあんなにネクタイクレージーになったのかよくわからないが、この時代はフラワーチルドレンなどが出現していて、ヒッピーの間で、花模様の幅の広いネクタイが大流行していたからだろう。だから、一柳さんもぼくにとっても、ネクタイはヒッピーカルチャーの象徴の一つであった。この時代に必死にかかわろうとした行為の表われが、あれほどまでに二人をネクタイに夢中にさせたのだろう。

今度、ネクタイのデザインを初めてすることになり、ムカシのことを思い出し懐かしがっている。今どんなネクタイが流行しているかぼくはまったく知らず、去年ロンドンのバンクファッションのお店で買ったネクタイが気に入ったので、それと同じサイズの細いネクタイを作ることにした。図柄は自作の油絵の一部を切り取ったもので出来上がって首に締めないとわからない。ぼくに似合わなくても若い人達が上手にこなしてくれることに期待している。

S.58.7.